山﨑樹一郎監督　カンヌ映画祭ACID部門
『やまぶき』公開記念凱旋トークセッション

『やまぶき』が咲く―学生時代からカンヌ、そしてこれからの「物語」へ

登壇者
山﨑樹一郎（映画監督）
小林康正（京都文教大学総合社会学科教授）
平尾和之（京都文教大学臨床物語学研究センター長）

日時：2022年11月13日（日）15:00-16:30
会場：京都文教大学　弘誓館G102教室
主催：京都文教大学臨床物語学研究センター
共催：京都文教大学総合社会学科メディア・社会心理コース
京都文教大学校友会

平尾　それでは、時間になりましたので、ただいまよりトークセッションの部を始めたいと思います。本日は雨でお足元の悪い中お越しくださいまして、誠にありがとうございます。ただいまより京都文教大学臨床物語学研究センター主催、京都文教大学総合社会学科メディア・社会心理コース共催、そして、京都文教大学校友会共催の、本学卒業生、山﨑樹一郎監督のカンヌ映画祭『やまぶき』公開記念凱旋トークセッションを始めたいと思います。司会は臨床物語学研究センター長の平尾が務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

会場　（拍手）

平尾　今日はYouTube Live配信もさせていただいてまして、遠くからも見ていただいてると思います。よろしくお願いします。会場もありがとうございます。今、多くの方が第１部の監督の長編第１作の『ひかりのおと』（2011）の鑑賞をしていただいたところです。それでは、トークセッションに先立ちまして、最新作の『やまぶき』の予告編をまずちょっと見ていただいて、それから壇上に、皆さん登壇していただきたいと思います。

（『やまぶき』の劇場公開予告編を流す）

平尾　それでは、山﨑樹一郎監督と、恩

師の総合社会学科教授の小林康正先生にご登壇いただきたいと思います。皆さん、拍手でお迎えください。

会場　（拍手）

平尾　はい、ありがとうございます。それでは、始めさせていただきたいと思います。監督、まずは今回のカンヌデビュー、そしてこの秋からですね。いよいよ『やまぶき』の公開、おめでとうございます。

山﨑　ありがとうございます。

平尾　５月でしたよね、カンヌ映画祭。

山﨑　ええ、５月の末ですね。

平尾　僕も新聞を読んでいたら、ばんと記事が飛び込んでまいりまして。それで、ものすごくうれしくなって、小林先生にすぐメールを差し上げたら、小林先生がすぐ電話をされたという。そしたら、カンヌから帰ってこられたばっかりで、もうへろへろですみたいな。

山﨑　そう。誉れであるっていうメッセージが届いて（笑）。

平尾　（笑）

山﨑　とてもうれしかったです、ありがとうございます。

平尾　あっぱれみたいなですかね。そのときに、ぜひ、機会があれば母校のほうにも凱旋いただけるといいですねみたいな話を、小林先生とは勝手にしてたんですけど、そうすると、先週から東京で、そして今週末から関西で舞台挨拶というタイミングでお越しいただけたということで、本当にお忙しい中、ありがとうございます。

山﨑　いえいえ。こちらこそ。京都が昨日から、京都みなみ会館で公開が始まりまして、多分３週間、４週間やってくれると思うんですけど。

平尾　最初は２週間って（笑）。

山﨑　そうなんです。

平尾　すごい本当に評判が高くて。

山﨑　いえいえ、ありがとうございます。昨日、登壇するタイミングで、関西が同時に大阪、神戸も始まったんで、それに合わせて舞台挨拶で来るってことになってたんで。

平尾　ちょうどタイミングが。

山﨑　ええ。いいタイミングで来させてもらって、本当、京都文教大学に来るのも、もう（笑）。

平尾　（笑）

山﨑　久しぶりですけど。楽しんでます。

平尾　先週から東京のほうで一足早く公開されて、SNS上でも話題沸騰というか、絶賛ですね。

山﨑　絶賛、ありがたいことに、いろんな意見をいただいて、観る人によってさまざまな感想が聞こえてくるので、とても不思議な映画だなというふうに思ってます。

平尾　本当ですね。昨日、実は、小林先生はじめ、京都文教大学の仲間で、初日の京都みなみ会館に寄せていただいて、そのあと登壇のご挨拶もされたんですけど、そのときにもおっしゃってて、観る人によって、やっぱり全然感想が違ったりとか。

山﨑　いや、ここまで多様化というか、ちょっと正直驚いてる感じですね。上映前に試写会とかやって、各界の、映画界のいろんな有名な人たちにも観てもらって、もう本当にコメントを読むのがとっても楽しいというか、それぞれ、そんなふうに捉えるかっていう。本当に語りどころが多すぎるのかもしれないです、もしかして。ちょっと不思議な体験をしてるところです。

平尾　だから、逆に言うと、観る人が自分の生活とか人生を重ねながら、いかようにも観られるというか、そういうところがあるんでしょうね。

山﨑　そうですね。だから、それが負担になるかならないかのちょうどバランスってあると思うんですけど、それが想像に頼りすぎると、やっぱり観ていてしんどくなってくるっていうことはあるんですが、割と積極的に何か発したくなるんじゃないかなというふうに、好意的に僕は捉えてます。

平尾　このセッションの前に『ひかりのおと』を観られた方も今ここに大勢おられますけど。すごく静かな、静かに始まって、基本的には静かな映画。主人公はあまり語らずだけれども、すごく強いというか。やっぱり監督の思いも含めて、すごく伝わってくるので。おっしゃったように何か言いたくなるというか、それに何か応えたくなる、リアクションしたくなる、そういうところがあるんでしょうかね。

山﨑　ありがとうございます。『ひかりのおと』は、僕もさっき一緒に観てたんですが、撮影したのは12、３年前で、いやぁ、恥ずかしいっていうか、恥ずかしいっちゃあれなんですけど。

平尾　（笑）

山﨑　いや、いい映画なんですけど、ちょっと僕も若かったっていう。昔の自分に出会ったような感じがして面白かったですね。

平尾　そういう体験なんでしょうね。昔の自分っていう。映画って残りますからね、そのときの。

山﨑　そうなんですよね。

平尾　でも、確実に続いてる感じですね、『やまぶき』に。『ひかりのおと』からのテーマもですし、監督の映画の独特のリズムであるとか、語り口であるとか、そういうのが本当に。

山﨑　そうなんですよね。そんなつもりは全くないんですけど、言ってることはあんまり変わらず、やろうとしてることも変わってないのかなっていう感じは、とてもしました。

小林　『やまぶき』は本当に解釈の開かれた作品っていうことで、昨日も、観た後にちょっと食事をして帰ったんですけど、映画の感想を聞いていてそんな解釈あるの？　みたいな（笑）。ちょっと驚きがあったりなんかして。でも『やまぶき』の話は後にさせていただくということで。

平尾　すいません、今日はライブ感満載でやってますので、いろいろなところをぐるぐる回って、最終的に大事なところをお伝えできたら（笑）。ちょっと、世界の国際映画祭の話に戻りますけれども、今回、カンヌをはじめとして16ですかね、いろんな国の映画祭に正式招待されて。そのうちで、四つの映画祭で受賞されたっていうことですよね。クロアチアのスプリト映画祭、イタリアのルッカ映画祭、この二つはグランプリですね。

山﨑　そうです。

平尾　それから、ロシアのウラジオストク。極東のほうですよね。

山﨑　そうですね。

平尾　そちらのほうで審査員特別賞。それから、地球の反対側のブラジルのブラジリアで、主演のカン・ユンスさんが最優秀男優賞ということで。本当に世界の人たちに評価されるというか、受け入れられるというか、共感を生むというか、そういうふうな映画なんですけど。あとで、いろいろ話になってくると思うんですけど、本当に岡山の真庭のローカルな生活をすごく丁寧に描きながら、それが、それだけ世界の多くの人たちに共感を生むというのはどういうことなんですかね。

山﨑　全くわかんないですよね、だから正直、全然わからないというか。いや、ただ現象だけ見ると、映画祭に出品するってこと自体、かなり選ばれている中で、賞をもらうっていうことは、深くまで届いてないことには、そんなことにはならないっていうことは薄々わかってるんですね。ってことは、何か突き刺さってるっていう認識はしていて、ただ、それが何でなのかなっていうのは、正直わかんないというか。真庭で生活しながら、山の中で暮らしながら、映画を撮るための葛藤であったり、憤りであったりっていうのは、生活してるだけでそれは感じることなので、それを、真庭の風景を日々ロケハンというか生活しながら、どう切り取っていこうかっていうのを日々考えているんですけど。今のその状況、世界中の映画祭において、地球的な状況っていうのが、ある程度共有されつつあって、ただ、一地方の山の中の、本当に辺境の中の辺境だと思うんですけど、そこで・・・

平尾　すごい山中ですよね、見てるだけで。

山﨑　そういうメッセージがすっと入っていくっていうことなのかなとか思ったりもするんですけど、いやいや、ほかにもたくさんいい映画はあるに決まってるわけで、とか思うと(笑)。いや、ちょっとわからないっていうことではあるんですけど。ありがたいことではありますね。

平尾　何か突き刺さる、どっかに突き刺さってるんじゃないかっていうことですけど、ひょっとしたら知らない間に突き刺さってるかもしれないですけど（笑)、僕の個人的な感覚としては、何かすっと入ってくるというか。観てる間に、監督の独特の詩的なリズムっていうんですかね。最初観てるときには、少しそこにチューニングするのに時間もかかったりもするんですけど、でも、観てる間に何かぐーっと入っていってるっていうか。僕、精神科医だったり臨床心理士で、普段はカウンセリングとか心理療法の中で夢を扱ってるんですけど、一番最初に、昨日『やまぶき』を観させてもらったあとの気持ちは、あ、夢から覚めたみたいな。(笑)。

山﨑　（笑）

平尾　何かすごく静かだけれども、心に深く残るような、夢を見たみたいな。そんな感覚だったんですけどね。

山﨑　でも、映画ってそういう体験でもありますよね。暗闇で光を見て、見終わったあとに現実に戻るっていうときの感じって、割と夢から覚めるっていうかもしれないですよ。

平尾　昨日は特別でしたよ。祷キララさん含め、スクリーンの向こう側の世界にいた人が、上映が終わって、ものの数分たたないうちに実際に、舞台挨拶ということで目の前に現れるっていう（笑)、このリアル感は。

山﨑　なかなかの体験ですよね。

平尾　なかなかの体験ですね。それ、本当にまさに夢から覚めたっていう感じがしましたけど。

小林　そうですね。

平尾　ネタバレだめですけど、どうですか、感想。

小林　ネタバレね（笑)。夢っていう話をなさってて、『やまぶき』のパンフレットの中で高橋源一郎さんが、小説と映画の超えられない壁みたいな話をちょっとしてて。その中で、やはり、私も確かに、観させていただいて、これは映画じゃないとできない表現だろうっていうのは、本当に感じたっていうところがあって、

それはまさに夢だっていうところだと思うんですね。小説って、やっぱり夢じゃないっていうところが、私なんか少し感じたりするんですけれども、そういった意味で言うと、今の夢だっていうのはすごく共感できますね。それは、本当に夢のまさにいろんな、特に終盤のほうだとは思うんですけども。ああいうシークエンスが重ねられるようなところっていうのは、本当に夢だっていうふうな感じがちょっとしましたね。

平尾　すいません、僕の夢ネタに引っ張らせてもらって、申し訳ないんですけど（笑）。フィルムで撮られてて、この『やまぶき』っていう作品は、その質感だと思うんですけれども、すごくリアルっていうか、観てる間に本当にその中に入っていって、全く、それも僕、夢って言っちゃうんですけど、入ってる間は本当にそれがリアルで、現実みたいな感じでわかんないっていうか。

山﨑　いや、そうだと思うんですよね。だから、僕も何となく漠然と、フィルムとデジタル、ビデオの違いっていうのは、言語として、言葉として説明はできるんですけど、だから、さっきも言ったような、言葉とか記号みたいなものが多分デジタルなんですよね。それは、やっぱり言語で表現されている、デジタルも含めての、それはちょっと飛躍しますけど、フィルムって、やっぱり現象を言語ではないところで焼きつけていることになるので、言葉で説明すると、そういうことなんだろうと思うんですけど、それって決定的に何か違うっていうのは、実際撮影して、それを見て編集してる中で、あ、これデジタルだとやっぱり映画にならない部分がフィルムでやることによって、映画っていう、言葉で説明できないもの。言葉や絵であったり、そういうものに、抽象的なものっていうかね、そういうような。

小林　デジタルで撮ると、モニタリングができるって話がありますよね。結果として、できあがったものでしかわからないっていう、そういうようなところと、関係ありますか。

山﨑　便宜上、それはまた別の問題になるかもしれないですけど、確認できないっていうのは、圧倒的に映画の中身は変わってくるように思ってますね。フィルムで撮る場合でも、隣にカメラを添えて、プレビュー用の同じような絵で撮って、それを確認するっていう方法があるので。でも、そういうことは一切しなかったっていうか、フィルムで撮るのであれば、現像に出して１週間たたないとプレビューできないっていう、だから、現場で直しようがないっていう、そのルールに基づいて作ったので、そうですね。それは映画的なルールではあるんですけど。さっきの決定的な記号言語みたいなところがデジタルで、そうじゃないもの、語りきれないものを捉えるのがフィルムっていうのは、さっき言ったような。

小林　そうすると、できあがった語りきれないものっていうのを、編集を数百回なさったっていうふうに伺っていて、できあがったものを今度、自分で観る側に回って観ていくっていうプロセスがあると、読み取るっていうプロセスがあって、そのあたりが私なんかはすごい、今まで持っていた映画の作り方と違うんじゃないか。違うって言い方おかしいんですけど、私が思っていたイメージとだいぶ違うんで、そういうのは作品に影響してますかね。

山﨑　とっても影響してると思いますが、狙ってやったことではなくて、脚本があって、撮影があって、編集があって、そういう流れなんですけど、本来、脚本がバチッと面白くて、それを現場で撮って、編集で脚本どおりつないで傑作ができれば、一番スムーズなわけですよ。

小林　（笑）

山﨑　一番短時間でできるし。僕の場合、脚本がかなりルーズで。っていうのは、現場で何か見てみたいというか、役者さんがその場所に立ったときに、脚本以上のものになるに決まってるって思っていて、そもそも、だから脚本をあんまり信じてないっていうか。言葉でしか書かれてないものなので、現場に行って、何か役者さんの発想がもっと飛躍すれば、そっちを撮りたくなるしっていうことでやっていると、結局、編集に負担がかかってくるんですよね。脚本のものが撮れてないので、現場で、僕のつたない記憶力で構成していったものが、ざっと映像として並んでいる。それをもう一回、今回は一旦脚本を忘れるぐらいまで、忘れるまで時間かかったんですけど、そこから再構成するっていうかたちでつなぎ合わせていって、再構成するためには、もともと狙いとして撮ってた部分じゃない感情とかも抽出しないといけないっていうことになって。だから、撮れた素材をくまなく、役者の表情を全部並べ替えたり、組み換えたりっていうのを、本当に２年半かけてやっていて。

平尾　ちょうどコロナ禍の中ですよね。コロナの２年半と重なってますよね、その過程が。

山﨑　そうなんですよ。どうせ完成しても、出しても劇場が止まってるんで。

平尾　そうか（笑）。

山﨑　ええ。時間かけてやるかっていう。

平尾　逆にそこでやれた。

山﨑　そういうのも重なって、独特な制作過程を経たんじゃないかなとは思ってます。

平尾　世の中でデジタル化が加速していく中でね。

山﨑　ただ、おすすめはしないですね、この作り方。

平尾　（笑）

山﨑　とんでもなく大変なんで。

平尾　むちゃむちゃお金もかかる。

山﨑　ええ、お金もかかるし。

平尾　全然違うんですね。１秒回すのにどれぐらいかかるんですか？

山﨑　フィルムは・・・いや、それは計算したくないですけど。

平尾　そうですか（笑）。

山﨑　回せば回すだけ。ビデオじゃないんで。

平尾　ですね。でも、昨日祷キララさんも言ってましたけど、それもみんなわかってて、本当に緊張感の中で、もうほとんど本番はワンテイクでやるぐらいな感じで。

山﨑　ほとんどワンテイクでしたね。

平尾　だからこそ、でも思い切った演技ができたっておっしゃってました。

山﨑　だから、言っても、役者さん、緊張したっていうことを言うんですが、こっちとしたら、なるべく１秒いくらだみたいな考えはしてもらわないように（笑）。

平尾　（笑）

山﨑　気にかけずに、もう自由にやってくださいっていう雰囲気を作ってやるんですけど、やっぱり、「用意、スタート」っていうところで、ウィーンって音が鳴ってるわけなんで、それは最近、特にフィルムで撮影されることなんて経験していない役者さ

ん、まだ若い人たちなんていうのは、まあ、それは緊張するでしょうねっていうのは思いますね。

平尾　今回、クラウドファンディングも使って費用も集められたっていうことで。ぜひ皆さん、これで山﨑監督ファンになられたら、また次の作品のクラウドファンディングに参加していただけたらと思いますけどもね。

山﨑　ありがとうございます。

平尾　ここでそろそろ僕、小林先生の目が気になってきたので、学生時代の話にいきましょう。

小林　（笑）

平尾　せっかく今日、母校に凱旋していただいてて。先週も１週間ずっと東京で登壇されたりとか、昨日も神戸、大阪、京都と１日で舞台挨拶されてるんですけど、なかなか母校でしか聞けない話っていうのがありますし、帰ってきてくださったからこそ、思い出していくみたいなこともあるでしょう。ちょっと聞いていきます。当時の人間学部文化人類学科の３期生ということで、小林先生が指導教官だったと。

小林　先生って、言ってますけれども、山﨑さんから私、「先生」って言われたこと、一回もないんです。

一同　（笑）

小林　最初、１年に会ったときからも「小林さん」でずっと通されていたっていう。

山﨑　そうでしたっけ（笑）。

小林　そういう関係でずっときてたんですけれども。

平尾　先生も若かった？

小林　そうですね。まだ若かったんじゃないでしょうかね、わかんないですけどね。

平尾　（笑）

小林　それで、今、真庭に来て何年になるんですかね。

山﨑　17年目ですね。

小林　17年目。前に一回対談したときに、大阪で生まれて生活してて、それで変な言い方ですが行き詰ったというか、どういうふうに暮らしていいかわからないっていうときに、真庭に戻っていくっていうことですよね。

山﨑　そうですね。大阪、京都で生活をしてましたね。大学に行って、８年ぐらい京都で生活してて。なかなか映画作ろうとしても、作る機会がないなっていうことであったり、親しかった仲間が自死したりとか、いろんな何か、その時代、とっても経済的にも就職氷河期で、そもそも就職なんか、僕、一回もしたことないし、面接もしたことないんですよ。

小林　それ、われわれも、就職なんかしなくていいんだよみたいなことを言っていたっていうところもあったんで、それで（笑）。

平尾　当時はね。

小林　当時、そんなこと言ってましたね。はい。それで、私がちょっとその話したいっていうのは、今現在、真庭というところに行かれて、それで、ある意味、盆地の小宇宙みたいなところですよね。

平尾　先生、行かれたんですよね。

小林　はい。

平尾　７年前でしたっけ、2015年の。

山﨑　フィールドワークされてますよ。

平尾　フィールドワークされたんですね（笑）。さすが。

小林　それで、そのときにも見て、前に、彼と一緒に学生時代にフィールドワークに行った愛知県の北設楽郡っていうところがあるんですけれども、その北設楽郡っていうところの「花祭」っていうのを、彼とは一緒にフィールドワークをして、そこでド

キュメンタリーの民俗映画を作ってくれて、それを、今日も持ってきてるんですけれども、作品として作ってくれたんですね。そのときが一緒に、多分、10日ぐらいで一緒に生活していたところだと思うんですけれども。

平尾　小林先生も一緒に行って作ってたんですか。

小林　そうです。

山﨑　僕はついていったんですね。

平尾　逆に、はいはい。

小林　そこで私、ちょっと勝手な思い込みなんですけど、あなたが真庭っていうところに戻っていくっていうのは、もともと実家があるからっていうことだと思うんですけど、お父さんの実家があるってところなんです。あのフィールドワークの経験とかっていうのは関係ありますか。

山﨑　めちゃくちゃありますよ。めちゃくちゃあります。

小林　誘導尋問ですけど（笑）。

山﨑　いやいや。人類学を、あんまり授業を受けた記憶もないんですけど、講義に最初のほうは出てたつもりです。人類学の何ぞやっていうところ、何か自分でも本とか読みながら知ろうとしてた。地域に入って映像を撮るっていうことはどういうことなのかっていうことは、すごいシビアに捉えていて、カメラという暴力性というか、一種の権力関係が。やっぱり暴力的に扱われてきたっていう歴史も踏まえながら、フィールドワークとして、カメラを持った僕は、そこに入って、どういうふうに撮ればいいのだろうかっていうのは考えながら作ってました。その実践として、花祭っていうのに入らしてもらって、関係性を作って、どういう社会なのかっていうのも僕なりに見て、その視点で初めてカメラを回すっていうところは、全く真庭に帰っても同じというか。ここでこれからもしかしたら映画を作るかもしれないっていう。そうするためには、どう地域となじんで、どういうポジションで、どういう視点を忘れずに生活すればいいのだろうかっていうことは、とってもやっぱり、野外調査ですね。当時、野外調査っていうのを経験して、だからこそ入りやすかったっていうのはとってもあります。それは正直。

小林　長編の３部作っていうのは、全部真庭を舞台にして、真庭、特に今度の『やまぶき』みたいなのは、真庭のいろんな場所にある、それぞれの場所が持っている意味を読み込ませるようなかたちで、そこに俳優が、ある意味、先ほどおっしゃってました自由、自由とまでは言わないでしょうけれども、比較的自由に動くような舞台として設定されてるっていう感じがしたんですけれども。で、ちょっと話がずれちゃったら申し訳ないんですけど、そういった舞台としての小盆地っていうか、小宇宙みたいなものっていうのは、ちょっと私、共通してるなと思ったんですね。北設楽郡の花祭地帯と非常に似てるなという感じがして。なので、『新しき民』の中でも、ちょっと引用してるようなところもありますよね。

山﨑　ええ、ありますね。だから僕の中で東栄町の花祭の経験っていうのは、やっぱりすごい衝撃だったし、そこで作った過程もいまだに覚えてますし。初めてゼミで行って、もう夜どおし踊る。で、変なお祭りに先生と学生数名で、酒を思いっきり振る舞われて、みんなベロベロになりながら、中には一緒に舞う者もいたり、

吐く者もいたりしながら、僕はずっとカメラを撮っていたっていうのは。とても美しい舞で、あれは一つの演技というか、芸術性の高い花祭の舞があるんですが、夜どおし、湯釜っていう釜を中心に据えて、もうもうと湯煙が上がっている中、太鼓と鐘が鳴って、若い人たちがとっても美しい舞を、剣の舞とか扇の舞とか、いろんな舞をするんですが、本当にもうトランスの世界というか、これは何か地域の中心、その地域社会の構造の中の重要な時間っていうか。そういうのが感じられて、何か世界観っていうか、そもそも、その年で僕は、大阪で生まれ育ったので、そういう生活の中にはない行事だったので、あ、こういうことで、何か社会であったり、人間関係であったりっていうのができあがってるっていうのを、あのとき感じられたっていうのは、とっても今につながってることだと思います。

平尾　見ますか？ 映像。映像あるんですよね、実は、貴重な。小林先生の研究室から発掘されたというですね（笑）。何か、当時は卒業制作みたいな感じですか、あれ。

山﨑　いや・・・。

平尾　卒論の代わりに、何かこういう。

山﨑　小林さんに言って、僕、あんまり字書けないんで、映像で出させてくださいっていって。

平尾　当時から、字よりは（笑）。

山﨑　映像で出す、じゃあいいよって言ってくれて。上のほうの人には怒られたみたいなんですけど。

一同　（笑）

平尾　卒論は書かず？

山﨑　ちらっと、映像の説明的なものは書きましたけど。一応卒業しました、それで。

平尾　そうですか。美大の映像学科ではないんですけどね。

山﨑　ないんですけど。

平尾　ないんですけど、はい。ちょっとこれ。照明を少し落としてもらって。ちょっと皆さん、雰囲気を味わっていただくためにも、当時の貴重な山﨑監督の学生時代の映像という、本当にレアな。じゃあ、お願いします。

（上映準備中）

平尾　これが発掘されて、今日は、監督へのお土産にDVDに焼いてもらったみたいですよ。

山﨑　僕も一応家を探したんですけども、全然見当たらなくて。「小林先生のところに、あるでしょう」って言って（笑）。

平尾　（笑）。でも、さっきのありありと、監督と先生との間でお話しされてるだけで、イメージがいろいろとわき上がってきますけど。

（上映開始）

小林　もうちょっと、あとのほうを少し回していただけると、さっき説明していたところに。

山﨑　釜があります。

小林　これが花祭のかまどなんですけど、もう、あと１、２分送らせていただけますか。これが湯ばやしっていうところで、舞ってるところなんですけども、何やってるか、ちょっとよくわかりませんよね。これが山﨑さんの映像の、その当時の特徴だったというふうに私は思うんですけど、結局、当時、民俗映像のドキュメンタリーって、とにかく俯瞰で撮ってわかりやすくっていう、見やすくっていうところだったんですね。とこ

ろがこれは、カメラ持ちながら（笑）、その中に入っちゃってるという手法を取り入れてやってるっていうところで、そのあたりがなかなかわかりにくいっていうところで、この映像は。

平尾　これ、ゼミ生も入ってるんですか、この中に。ゼミ生はいないんですか。

小林　ゼミ生はいない。

平尾　写ってない。

小林　それで、お湯をかけるんですね。

山﨑　カメラの位置、これ、結構近いんですよね。多分、後ろにもたくさんいるぐらいにポジション取って、三脚立てて撮ってるんですけど、いきなり行って、この場所では撮れないんですよね。多分３日ぐらい、２日かな、ぐらいずーっと、夜、人がいないときもずーっと撮影してて、関係者の人とも話しながらしてて、この場所でカメラを据えても嫌がられないっていう。カメラが社会の中に入れたと思ったときはあったんですね。で、僕ももう、何か興奮しちゃって、カメラ持ちながら・・・

小林　カメラぶれてますよ（笑）。

平尾　（笑）。ちょっとお湯が飛んできちゃってますよね、カメラにね。

山﨑　熱湯なんで、めっちゃ熱いんです。

平尾　熱湯。

小林　もうちょっと見たいんですが、この辺で、はい。

平尾　はいはい、ひとまずね。ありがとうございます。雰囲気伝わってきました。

（上映終了）

小林　そういう、当時あった民俗映像って、とにかくきれいに、わかりやすく撮るっていう手法だったんですけど、彼はそういった、ちょっと違った、いわゆるドキュメンタリー。

山﨑　ドキュメンタリー映画の方法というか。説明するというよりかは、その熱であったり、人を撮っていくっていう。関係性、もちろん作るっていうのは同じなんでしょうけど。

小林　だから、そういう映像の力っていうのに対する一種の信頼というか、そういうのがあるわけですよね。それを伝えるべきであるという信念があったっていうことですかね。

山﨑　研究用の映像ほど、くだらないものはないっていう。

平尾　（笑）

山﨑　それが民俗ライブラリーみたいな感じで、8000円とかで売ってるわけじゃないですか。誰が見んのやろうと思ってましたけど。

平尾　参与しながらの観察っていう言葉もありますけど、やっぱり自分が主体的に、その中に関係性も作って入っていったうえで、被写体を撮るっていうことですかね。

山﨑　そうですね。でも、それって、僕が別にやり始めたわけじゃなくて、野田真吉とか、いるのはもともといて、作家性が出るっていうことだと思うんですけど。

小林　作家性で言うと、こういったかたちで被写体に突っ込んでいくっていう以外にも、枠組みとして、ちょっと出てこなかったんですけど、花祭会館の館長さんがいて、その館長さんが、花祭会館っていう博物館があるんですけど、その博物館の展示をしていくっていうのを狂言回しみたいにして、そこに映像を入れていくっていう、そういう作品としての試みみたいなものも、やってたんですよね。あれも面白かったですね。

山﨑　本当、独特で個性的な館長さんで、この花祭って、鬼が何パターンか出

てくるんですけど、鬼のお面がとってもかっこよくて、怖いんですけど、おっきくて、榊の鬼とか、いろんな鬼がいるんですが、そのお面にだんだん館長さんが似てくるっていうか、彫りが何か本当にもう、とっても個性的な館長さんで、その人を撮るだけでとっても面白くて、話はあんまり入ってこないんですけど。その人が花祭会館を説明して回ってるのが、とっても花祭らしいというか、祭りそのもの。言葉では入ってこないんですけど。

小林　そうですね。だから、言葉も非常に不明瞭でね。映像とのつながりもちょっと、一見するとわからないんですよ。なんで、それで評価低くてですね。当時、文化人類学科賞ってあったんですけど、それで佳作にしかならなかったんですね（笑）。

山﨑　ああ、そうでしたっけ。そうです。めっちゃ応援してくれたんですけどね。

平尾　ああ、そうか（笑）。

山﨑　選考委員の先生をディスってました（笑）。

平尾　（笑）。いや、当時から、その異色ぶりがよく伝わってきますけれども。僕も文化人類学は専門じゃないんですけど、文化人類学って、やっぱり自分がよそ者っていうか、異質なものとしてそのフィールドに入っていって、だからこそ見えてくるものがあったりだとか、撮れるものがあったりっていう感じがあるんでしょうね。さて、この流れでそろそろローカルとグローカルみたいな、地域と世界のつながりの話にも入っていきたいと思います。もう真庭に住んで16、17年ですよね。だけど、びっくりしたのは、この『やまぶき』のパンフレットを見ると「よそ者の僕を受け入れてくれて」みたいなことが書かれている。そういうよそ者みたいな言い方もされていて。

山﨑　だから16、７年経って、もちろん変わってもきていて、最初入った頃っていうのは、やっぱり完全に都会から来たよそ者っていう立場で。

平尾　おじいさん、おばあさんがいたところだけれども。

山﨑　ええ。そうだし、自分の習慣と違う地域の習慣を、割と批判的に受け止められていたというか、一つ一つ気になったことが認識できていたんですけど、だんだん生活が進むにつれて、そこは鈍ってくるんですよね。だから、こっちの習慣、地域の習慣、風習が理にかなってるってことを発見し始めるんですよね。そうなってくると、都会で住んでいた批判的な感覚っていうのが逆転していくっていうことがあって、だんだんよそ者を、もともとよそ者なんですけど、地域と同化していって、そこからできたのが、今回『やまぶき』っていうか。だから、都会から来た、何か批判的に地域を捉えてるっていうことでもなくて、中から、その地域を批判的に捉えるっていうことが、別に悪い意味だけじゃなくて。批評って言ってもいいかもしれない。そういうことができたんじゃないかなというふうには思っています。

平尾　それは『ひかりのおと』の11年前、っていうことは、まだ真庭に入って５年とかですよね、その頃とはちょっと違う。

山﨑　そうですね。これ、やっぱり、まだ何かシティボーイ感ありますよね、何かね。

平尾　（笑）

山﨑　何か嫌な感じがちょっとしますよね。

平尾　東京から帰ってきて、葛藤して。

山﨑　いえいえ（笑）。嫌な感じというか、ちょっと気になるところはありましたね。

平尾　もうちょっと具体的に、真庭での生活も聞いていきたいんですけども、農業をされていて。

山﨑　いえいえ、農業は本当に中途半端というか、時間がやっぱり映画と農業で引っ張り合いっこになっちゃうんで、どうしても、まあ生半可にはできないことでもあるんで、だから、当時やってた面積よりかは、今、半分にして続けてるっていうことはあるんですけど。今日もまだ採り残してしまったり、トマト自体を。だから中途半端ですよね。中途半端に、それでも17年間、一応植えつけはして、やってはいるものの、なかなかその時間の、映画と農業っていうのをうまくやりたい、やりたいと思いつつ、なかなか、そんな簡単なものではないっていう。

平尾　でも、ちょっと僕、発見しました。『新しき民』のときは試写会に監督が現れなくて、その理由が「トマトの収穫日で忙しいから、映画の試写会に行けません」って。

山﨑　そうそう、だから、もちろん９月とかまでは、もう全然動けない。本当は10月、11月っていうのも仕事はあるんですけど、どうしてもやっぱり重なってくる部分は、映画は一人でやってないんで、農業は自分の、結局、自分の責任で止めたりできるんですけど。

平尾　今一人でですか、トマト農家自体は。

山﨑　ええ、そうです。もちろん産地があって、農家さんはたくさんいらっしゃるんですよね。

平尾　『ひかりのおと』の中でも、まさに今の監督の気持ちを、主人公が代弁したかのように、酪農も音楽も中途半端みたいな感じのことを言ってました。

山﨑　いや、まさしくまさしく、中途半端です、どっちも。

平尾　いや、中途半端でカンヌデビューできますかね（笑）。

山﨑　いやいやいや。

平尾　とも思いますし。あと、監督が地元の仲間と、YouTubeでお酒飲みながら、だらだらしゃべってるのを観させてもらったんですけど（笑）。

山﨑　ああ、そうですか（笑）。

平尾　山﨑さんちのトマトはうまいねとか仲間たちは言ってますけど、それでも監督の中では、まだそういう感じもあるんですか。中途半端感っていうか、両方やってて。

山﨑　この『ひかりのおと』の主人公も言ってたように、どっちも楽しくやってるっていうか。それを経済的な指標とか、そういうことで当てはめると、完全に中途半端ですよね。

平尾　でも、それは監督、経済的な指標なんてぶっ壊せでしょ？　レジスタンスじゃないんですか、そこは。

山﨑　いやー、娘が２人いるんで（笑）。

平尾　（笑）

山﨑　割と切実なところでもあるんで。

平尾　そうですか。資本主義なんてぶっつぶせじゃないんですか。

山﨑　いやいやいや。いろんな捉え方。資本主義っていっても一筋縄ではないんで。

平尾　だからこそ、こうやって映画の宣伝にも来てくださって（笑）。

山﨑　ええ、ええ、そうなんですよね。

平尾　もちろん、お金のことだけじゃなくて、この作品、僕もそうですけど、心からいろんな人に観てほしいと思いますし、そういうことでしょうけども。そうですか。

山﨑　ライヴ配信もあるんで、あんまり思い切ったことは言わないほうがいいかなと思って（笑）。

平尾　（笑）。ちょっといろいろ考えて。

小林　でも３作とも、映画の中には、基本的に金銭の問題っていうのは入ってきてますよね、必ずね。

山﨑　ええ、入ってます。やっぱりそこは、映画を描く中で捉えたいところなんですよね。

平尾　本当リアルですよね。夢のようだって、僕さっき言いましたけど、やっぱり監督の映画、ドキュメンタリーっていうことの下地っていうか、そういうのがあるから、皆さんも感じたと思うんですけど、基本的に物語映画でフィクションなんですけど、非常にリアルな、われわれが生きている現代の生活を掴み取っている。しかも、地方のつつましい人々の現実の生活を丁寧に撮ってるなっていう感じも強くあるんですけどね。

小林　そうですよね。『ひかりのおと』もドキュメンタリーを見てるようなね。そういうような感覚しますよね。それは、また引きつけちゃうんですけど（笑）。

山﨑　いえいえいえ（笑）。

小林　かつてドキュメンタリーを撮ってたっていうことと、やっぱり引きずってる部分があるっていうことですね。

平尾　引きずって（笑）。

山﨑　ドキュメンタリー映画に衝撃を受けたっていうのが、やっぱり学生時代に小川紳介とか土本典昭とか、学生運動を捉えたドキュメンタリー、とても優秀なドキュメンタリーがたくさんあって、それをまとめて観る機会が、わりと京都は多くて、そういうのを観ていて、とっても何か映画だなと思って。生々しいドキュメンタリーっていうことではなくて、興奮するし、コントラスト、絵的にも、ものすごいフレーミングもとってもすばらしいし、物語すらあるみたいな。そういうのがドキュメンタリー、生のものを撮っていても、それはフィクションであるっていう。だから、ドキュメンタリーとフィクションの垣根みたいなところをとっても考えていたことがあって。それって、背景、場所、人物以外のものと人物が乖離してないっていう。それはドキュメンタリーであれ、フィクションであれ、やっぱり乖離しちゃうと、それはなかなか、説得力がないっていうことがあると思っていて。だから、僕は住みながら撮ってるっていうことは、それ、乖離してるかな、乖離してないかなっていうのは判断がつくんですよね。その地域と役者さんが生きた人物っていう、そこのジャッジはできるっていうのがあって。だから、ドキュメンタリー映画の背景と、人物の固定されたものっていうものの躍動感みたいなところが、とっても大好きだったのかもしれないですね。だから、そこは気をつけてやってるんですが、なかなか難しいです。

平尾　ちょっと戻るかもしれないですけど、監督は真庭で生活をされて、しかもトマト農家をされていて、それと映画作りををされていて、ある種デュアルな、中途半端とおっしゃいましたけれども、両方生きているみたいなところがあって。これはでも、監督だけのテーマではなくて、『ひかりのおと』の主人公もそうですけど、青年期、いろいろと夢があって、自分がやりたかったこととか、だけども、現実はこっちの人生を仕事的には歩んでるとか。もうそれはみん

な、中年にもなればだんだん、そうやってみんな大人になっていくっていうか、自分の心の中の夢とかあこがれと、現実との折り合いをつけてやっていく、みんなのテーマですよね。そういう意味で、映画もトマト作りも両方やっている監督の生き方は、僕はやっぱりかっこいいと思います。農業、トマトを作りながら、監督のことだから、そこにもすごく心のエネルギーが注がれてると思うんですね。映画作りはもちろん、もう見てるだけで、一つ一つに心のエネルギーが注がれてるのが、ありありと伝わってきます。カンヌでも尋ねられてましたけど、デュアルに二つをやってることって、ご自身の中でどういうふうにつながってますかね。あえて言語化していただくと。

山﨑　どっちか一方をするっていうことが想像できないっていうのがあって。っていうのは、デュアルっていうことには全然捉えてはないんですけど、例えば、農業、トマト、ビニールハウスの中でいろんな作業をしてるっていう。そんなうまくはないですけど、楽しいんですよね、本当に。その作物を管理してあげるっていうことを、延々とハウスの中で、くそ暑い中でやってるのが好きなんですよね。映画もそうで、だんだんかたちになっていくのが好きなんですよね。もう本当にそれだけというか。どっちも好きだから、どっちも続けると、やっぱりどっちかにしなさいっていう・・・

平尾　（笑）

山﨑　時間の制約があるわけですよね。どっちかにしてたら、こっちがだめになる。追々こっちやらないとっていうことを延々とやってるだけっていう。本当にそれで、もう家族は本当にあれですよ、「好きなことして」っていうことになるんですけど（笑）。

平尾　監督のすべての作品、やっぱり家族のテーマも流れてますしね。それで、カンヌのときには、農業をやってることで自然の力っていうもの、自分を超えた力が働いているのを感じる、それが自分が作る映画にも影響してるんじゃないかっていうことはおっしゃられてましたね。

山﨑　農家をやったことがある人って、多分、都市生活と全然違う時間軸であったり、ものの考え方って本当に違うと思っていて。僕、だんだん時計が全く計算できなくなってるんですね。だから上映時間、例えば３時に始まって、97分の映画は何時に終わるかっていうのは全然わかんないですよ。時計の計算が本当にできなくなっていて。っていうのは、多分お日さんとか、だんだん変わっていく日の出の時間とかのほうが生活に密着してるっていうか。だから時間感覚が、田舎の人は時間にルーズって、よくいいますよね。この土地独特の時間みたいな。あれって、多分農業が身近にある人たちっていうのは、自然とそうなっていくんだろうなっていうのは、うまく多分説明できてないと思いますけど。

平尾　いえいえ。

山﨑　そういう意味では、さっきおっしゃられた自然の中の人物、人間、生きてるっていうことがベースになってるのかもしれないですね、映画の中でも。

平尾　監督の映画には自然が、特に光の音が本当に聞こえた感じがしたんですけど。

山﨑　いやあ、ありがとうございます。

平尾　日の出のシーンもそうですし、映

画ってやっぱり光をどう定着させるかみたいなところがあると思うんですけど、それがすごく深く映画に刻まれてるなって、自然の光が。それは、やっぱり、今のおっしゃられてたこととつながりそうな感じが、僕はしたんですけどね。あと、今、大学も地域とのつながりとか、グローカル人材を育てようとか、いろいろ、そんなこともあったりするんですけども。監督の映画もそうですし、生き方もそうなんですけれども、地域で生活してて、真庭という地域にも、確実にグローバルな世界で起きてることの波が押し寄せてきている。もうそれは、『やまぶき』でもありありと描かれてますよね。ネタバレはしませんけども、女子高生のやまぶきはとっても遠くのことを思っていたり、思いを馳せていたりする。世界的な視野と地域、ローカルとグローバルをつなぐっていうか、そのあたりのリアリティはどういうふうに感じておられますか。あるいは、どういうふうに表現していこうとされてますか。

山﨑　多分、自分の置かれてる場所みたいなもの、自分が関係してる場所みたいなものを、どれだけ知ってるかっていう。だから、自分の今いる場所の捉え方というか、それがあると、よそに行っても比較できるっていうことがあると思っていて。例えば、一見、この京都文教大学という学校があるけど、ここは400年前はどういう場所だったのかであるとか、どういう戦いが行われて、どういう人たちが住んでいたのか。

平尾　『新しき民』ですね、それは。

山﨑　そうなんですよ。だから、真庭で何が起こって、一見、普通の自然の場所でも、何か営みがずっとあったわけじゃないですか。

平尾　巨大な池があったみたいですけどね、ここは（笑）。

山﨑　そうですね。

平尾　はい、巨椋池か。

山﨑　巨椋池か。だから、そういうのを想像して、この場所、ここの、今はこういう場所だけど、どういう場所なのかって知らないと、その場所、風景と人物っていうのが、どこでもいいんだな、これはっていうふうに見えちゃう。ここじゃないといけないんだっていう、それって、多分、言葉ではなかなか難しいですけど。それを知ってるか、知ってないかで、よそに行って自分のことが説明できるのか、説明できないのかっていうことがあるんで。結局、グローバルとローカルの話で、ローカルをどれだけわかってるかっていうことじゃないと、グローバルではやっぱり表面的なことにしかならない気が。どれだけ世界の情勢を知ってようが、自分の場所っていうのをちゃんと捉えられているのかっていうことって、やっぱり見ますよね。それ、一番聞かれるところですよね。映画なんか、まさしくそこを求められてるっていうか。そんなことはわかってるよっていう。あなたの土地のことを見たいんだっていうことだと思うんで。娯楽映画は別として、それはたくさんある。

平尾　本当、『新しき民』っていう映画はまさにそうですし、皆さんも見てほしいんですけど、地の記憶っていうか、土地の記憶というのをものすごく想像されて。監督は世界にも広げていくっていう、空間も超越されてますけど、時間も超えて遠くを見ておられるなっていう。

山﨑　聞かれるとそういう答えをします

けど、そんな意識的には。

平尾　すいません（笑）。

山﨑　生活してるわけではないです。

平尾　ここはトークセッションなんで、言語化してしまって申し訳ないんですけど。

山﨑　いえいえ。

平尾　やっぱり、『やまぶき』もそうですし、監督もそうですけれども、遠くを見てるだけじゃなくて、土地に深く根を下ろしていってるっていうか。深く根を下ろすからこそ遠くが見れるんだろうなっていう、そういう印象が。

山﨑　そうです、そうです。それはまさしくあれですよ。小林さんにゼミで。

平尾　小林さん（笑）。

山﨑　教わったことですね。ドゥルーズか何かの、リゾームの橋頭堡の話はいまだに覚えてますけど。何か拠点を作って、こう。何ていうんですか。ちょっと。

小林　忘れました。

山﨑　忘れました？（笑）。あれはいまだに覚えてますね。ホワイトボードとかに。当時はポカンでしたけど、ああ、なるほど、なるほどっていう。

平尾　どこかにそれが身に染みてるんですね、きっとね。それだけやっぱり深いところを掘ってるからこそ、これだけ世界の人たちに通底するのかなっていうね。そういう気さえするんですけどね。

山﨑　いやいやいや、本当に。

平尾　（笑）

山﨑　頑張ります。

平尾　いやいやいや（笑）。

小林　フランスに行かれて。

平尾　そうか、フランスの話ですね。

小林　それはどうでしたかね。

山﨑　カンヌとは別にフランスに友人がいて、彼と久しぶりに会ったときに、僕も真庭で子どもたちに創作のワークショップをしたりして、映画っていうものの面白さを伝えたいなと思って活動はしてたんですけど、その友人と会ったときに、フランスでは30年以上前から、公教育の中で、映画を見せて先生がそこで教えて、映画を題材にして、いろんなお話をするみたいなことをしてると。フランスはどんな田舎に行っても、映画館が、シネマがあって、そこに学校の子どもたちがみんな観に行って、教室に帰って授業をするんですけど、その作品選定も、学年に合わせて、国の文化省と国立映画センターっていうものが一緒になって、専門家と一緒にやって、とっても多ジャンルで、世界中の映画をバランスよく年間３本見せるっていうプログラムをやっていて。子どもたち、例えば３歳から見始めたら、高校卒業する15年間で、45本ぐらいですか、映画を観て、それも世界中の映画を見て大人になっていく。小津安二郎の『お早よう』とかも観てるんですね、フランスの子どもたちは。

平尾　日本人でもどれぐらい観てるかっていう（笑）。

山﨑　日本人の皆さんですら、あんまり聞いたことないかもしれない。子どもたちなんか絶対知らないし、それを外国の人たちは既に観てるっていう。

平尾　観てる、すごいですね。

山﨑　やっぱり、その土壌の違いっていうのは、今後さらに開いていくっていうことだと思っていて。今、とっても映画のアートハウスというのか、商業映画じゃない、映画の多様性を担保するような劇場の集客がどんどん減っていって、コロナも関係してるんですけど、そういうふうなこと

がいわれていて、一時的にそれを解消できることなんかもやり尽くしていてどうにもならないっていうことで、本当に子どもたちに、いかに観てもらって、映画との距離を近く思ってもらうっていうことをやらないと、本当に日本映画の多様性みたいなものが大変になってくるんじゃないかなということもあって、文化庁に、調査に行きたいですって申請して、１カ月間だけ行くことができて。フランスの地方から都会から何カ所も、実際の映画教育が行われている現場に行って見てきたんですけど、当たり前に映画っていうものが学校の中にあって、先生たちも楽しみながら、子どもたちなんか本当に大好きっていう感じで。子ども映画祭っていうのもフランスはたくさんあって、その子ども映画祭っていうのと学校の授業が連動して、普段は映画館行って授業するだけだけど、映画祭のときは、例えば作家が来て、子どもたちと触れ合ったりみたいなこともやったりして。映画の捉え方としては世界の窓というか、スクリーンが世界の窓なんですよね。そこを通じて、いろんなことを視野を広げて、子どもたちの選択肢を増やしていくっていう意味では、リテラシーとして捉えることもできると思うんですけど、メディアリテラシーとか。ただ、本当にフランスの根っこにあるのは、本当に映画を楽しんでくださいっていう、楽しみましょうっていうのが一番にあって、それはとても魅力的だなと思って、真庭でも教育委員会に交渉したり、市長に話しに行ったりして、こういうことをフランスではやってるから、ぜひ真庭でも実践しましょうっていうことで、何校か、校長先生が手挙げてくれて、今、年１回ですけど、小学校と中学校で映画を見せて、フランスの先生にオンラインでつないで授業してもらうっていうのをやってますね。３、４年続けてやってるんですけどね。広がっていけばいいなと思っていて、真庭市だけじゃなくて、ちょっとずつ、やろうかなっていう自治体も出てきたりしてて、これが広がっていけば面白いなあとは思ってるんですが、なかなか、それが本職じゃないんで、地道に地道にやってる感じです。だから、音楽とか美術とかと同じように、映画っていうのが一つの選択肢としてあったらいいなっていうふうに。大変ですけどね。理想はそういう感じで。

平尾　この臨床物語学研究センターでも毎年お招きする平田オリザ先生は本学の客員教授でもあるんですけど、豊岡で生活されながら、それこそ学校教育の中に演劇教育を入れていかれています。そのあたりはすごく重なる感じがありますね。監督、４月から『やまぶき』のフランス公開も決まったと。

山﨑　そうなんですか、４月なんですか。

平尾　（笑）。違いましたっけ、いつから。

山﨑　春ぐらいにするかなっていうぐらいの情報が、今、出てますね。

平尾　春ぐらい、勝手に４月と思ってましたけど。

山﨑　僕も本当に詳しく全然聞いてないんですけど。

平尾　そうなんですか。ということで、本当にフランスの公教育の中で、山﨑樹一郎監督の日本映画がフランスの子どもたちに入っていくかもしれないですし、逆に、フランスの映画を真庭の子どもたちが観て育っていくのかもしれないし、そのあたりは本当に夢が広がりますね。

さて、ちょっと１時間半のトークセッションって結構長いって、皆さん思ってたかもしれないし、樹一郎監督も長いんじゃないですかって言ってたぐらいなんですけども（笑）、あっという間ですね。このへんでせっかくですし、ぜひフロアの皆さんと監督との対話をしていただけたらと思うんですけれども。多分皆さんうずうずしてる方もいるんじゃないですか。監督と直接お話ししたいとか、懐かしい方もいるでしょうし、どうですか、いかがですか。これはちょっと聞いてみたいと。

（間）

平尾　うずうずしてる森学長、どうぞ。壇上に上がると、どうしてもつい教員ぐせがでちゃうもんで、僕のほうから当てちゃうんですけどね（笑）。

森正美　今日はどうもありがとうございます。森です。学長って指名されて、ちょっと気が重いんですけど、森さんでよかったぐらいなのって感じですけど（笑）。本当にさっきの作品もすばらしいし、これも絶対観なくちゃって本当に思うぐらい。小林先生とのかけ合いも、長年の歴史を感じて、すごいよかったなと。でも、おっしゃっていることが本当に文化人類学の視点の話なので、その話自体もすごいわかるし、刺さるって感じなんです。ありがとうございました。一つ、ご質問なんですけど、視点の移動が、ご自身の生活の拠点の移動とか、対象との距離とか、あるいは、それをフィクションにするか、ドキュメンタリーにするかっていう表現方法とか、それも多分、距離感の移動みたいなところもあって、すごく面白いなと思ったんですけど、そのうえで質問としては、山﨑さんが作られたものを地元で上映されたりしたときに、地元の方は、それをご覧になって、どんなふうにおっしゃっているのかなっていうのを教えていただけたらなって思います。よろしくお願いします。

山﨑　よろしくお願いします。ありがとうございます。そうか、森先生が学長に今なられてると。ええ、ありがとうございます。地元の方々には観てもらってます。上映会は毎回、特に、この『ひかりのおと』っていうのは、震災直後に公開ってことになって、どういうふうに見せていくかっていうのはとっても迷って、当たり前に劇場、都市部だけ劇場公開してっていう選択肢と思ってたんですけど、いや、今、震災の直後に、この映画をどういうふうに見せるかっていうのは、みんなで考えたときに、地域のネットワークを、映画を介して作りたいっていうことで、岡山県内だけで、50カ所、100回上映をやったんですね。それは地域地域にキーマンとなる人たちを探して、紹介してもらったりして、僕たちが行って、こういう映画を上映したいっていうのでブッキングして、４カ月、５カ月ぐらいでそれだけをブッキングして、ツアーみたいな感じで映写機持って、例えば公民館であったり、小さい喫茶店もやりましたし、田んぼで野外上映とかもやりましたし、ライブハウスとか、いろんなパターンの上映方法をして、映画を介して、地域にクモの巣を張るようなイメージで上映活動をしました。中には、全くわかんないっていう人も、わかんない、こんな映画だと思ってなかったみたいな意見ももちろんありますし、いや、50年ぶり

に映画ってものを見たっていうおばあちゃんとも出会えますし、頑張ってくださいとかっていう方もいますし、ポカーンとして帰る人もいますし、いろんな方々がいる。で、知ってる場所が映ってるのがうれしかったみたいなことも言ってくれる人もいますし、いろんな感想がありました。『ひかりのおと』って、映画祭なんかでも評価されたりして、行政の人たちも、手のひら返すように応援に回るわけですね。今までは何じゃ、映画なんぞっていう、できるわけないみたいなことだったんですけど、ぱっと手のひら、こうやって。『新しき民』って時代劇、大変だったんですけど、それは『ひかりのおと』の勢いを持って、次は一揆を起こすかのように映画を作ってみようっていうのをみんなで決めて、本当大変すぎたんで、それでみんな消耗してしまう、僕も含めてですけど。そのあとは沈黙をしまして、５年かけて『やまぶき』を作ったという流れでしたが、地域の人に『やまぶき』はまだ、都市部から上映をやろうっていうふうに思ったので、これからですね。来年初めぐらいに観てもらうっていう予定です。山中一揆に関しては、真庭の歴史なんで、真庭の人たちに見てもらって、「一揆のことは知っていたけど、どういう内容か知らなかったので、観てよかった」っていう感想もありますし、学校で、それこそ授業の中で、一揆を扱う中で『新しき民』を観てもらうこともありますし、一つの教材みたいな感じで扱われてるなというふうには思っていて。

平尾　むちゃくちゃ揺さぶられるでしょうね。その土地でまさに生きてられる人だから、その土地の記憶みたいなことが多分眠っているわけでしょ。個人の中じゃないかもしれないけど、ずーっと引き継がれてるわけですよね、それが。

山﨑　そのはずですけど、気にせずとも生きてはいけますよね。

平尾　はい（笑）。そこが文化人類学と臨床心理学の違いかなと（笑）。はい、ありがとうございました。

（間）

平尾　はい、他どうですか。同級生がいましたね。

男性A　そうなんです、お久しぶりです、山﨑監督（笑）。

山﨑　いえいえいえ。

男性A　当時、民俗学のゼミで、身体技法論っていうのを小林先生がやられてたんですけど、そのときのゼミの発表とかだったら、80年代のスタンリー・キューブリックの、確か『フルメタル・ジャケット』をゼミの発表で山﨑監督がおっしゃってたっていうのは、ちょっと今でも覚えてるんですけど、あの頃から、ずっとたばこ吸いながら、ずーっと映画の話してるっていう（笑）。

山﨑　（笑）

男性A　そういう記憶があって、もう今、カンヌにまで行かれてるということで、すばらしいなと思うんですけど。本当に、ずっと今みたいにずーっと映画のことを話すっていう人でした、はい（笑）。質問なんですけど、最近観られた映画はどんな映画ありますか。

山﨑　最近、本当にばたばたで観てないですね、ええ、何だろう。映画じゃないんですけど、『エルピス』っていうドラマが今、月曜日10時からだったかな。やってるんですけど、

あれは、映画の脚本を書いてる渡辺あやさんっていう方が脚本を書いていて、とっても政治的な突っ込みであったり、ジェンダー的な捉え方であったり、よくまあそこまで男性社会を徹底的に突っ込むというか、切り込むのがテレビでできるなっていうのがあるし、とってもドラマ自体面白くて、それも、フジテレビでやってるっていうのがまた笑えるんですけど。フジテレビって、やっぱり軽いんだなあっていう（笑）。振れ幅が軽いなと思って。いや、でも、すごいうれしくなりました。そういうことがテレビでもできる状況になってきてるっていうのが、素直にそれはとっても喜んでいて、ぜひ皆さん見てほしいなと思います。『エルピス』ですね。テレビ局の番組の話で、ある事件を冤罪かもしれないと思って追求する女性アナウンサーの話なんですけど、その女性アナウンサーは、なかなか、企画を通そうとするんですけど、こんなことできるわけないでしょ、テレビでっていうようなことを、どんどん、テレビの内実を暴いていくみたいな。だから、自己批判的なことをテレビ局がやってるっていう意味で、とっても、よくぞまあっていう。もう、あっぱれっていう感じのドラマです。それは３話まで見ました。映画、本当最近見てないですね。

男性A　自分も『エルピス』観てます。

山﨑　面白いよね。

平尾　普通の学生時代の会話みたいになってますね。

会場　（笑）

平尾　それもいいところですね。はい、次の方お願いします。どうぞ。

男性B　高齢者アカデミーの卒業生なんですけども、今、地域で自治会をやってるんですけど、地域の地下水を守るために、戦後からの歴史を、会報を読みながら地域を理解しようという活動をやっていて、地域のことを一番よく知っているのは僕だと思ってるんですけどね。60年ほど生きて、この地域に住んでいますから。ただ、地域の人との関係性の問題なんですけど、一介の住民として地域の人とつき合ってる場合と、自治会の会長としてつき合ってる場合に、やっぱり齟齬があるんですね。きっと農業をやっておられて、農家さんという場合と、映画監督というふうに見られてる場合と、少しやっぱり距離感というか、違うような気がするんですよね。そのあたりは、どういうふうに自分の中でうまく消化してはるのかなというところを、ちょっとお尋ねしたいなと思うんですけど。よろしくお願いします。今日の話とっても面白いです。

山﨑　ありがとうございます。そのポジションならではのかかわり方っていうのは、本当にやめるべきだと思っていて、だから、いろんな肩書きであったり、役職であったり、そういう鎧で重たくなった体で接すると、いちいち脱着して人と関わるっていうことになっちゃうんで。そもそも、そういう鎧っていうのは肩書だけじゃなくて、考え方もそうだと思うし、価値観もそうだと思うし、思想もそうだと思いますし、そういうものははなっから脱ぎ捨てちゃって、できることならね。それはなかなか難しいことだと僕も思っていますが。そうなったほうが、結果、誰とでも同じように接することができるっていうことで、生きやすいんじゃないかなと思ってはいます。だから、本当に映画監督とか農家とかっていう、

その肩書きありきで話すことほど、結果、しんどくなるっていうことはないんじゃないかなとは思ってます。

平尾　今の話はすごく思いますね。監督の映画ってある種すごく主張が強いところは感じるんですけれども、でも、それがあんまりこう、僕も多分、監督と主義主張が違うところもあると思うんですけど、あんまりぶつからないんですよね。それは、今、監督がおっしゃられた、人間と人間の、それこそ本当の対話っていうかね。相手も尊重されてるだろうし、そういう感じがしますね。

山﨑　田舎ってそうなんですよね。そうじゃないと生きていけないっていう。一人一人がやっぱり近いんで、思想とかイデオロギーの違いで固まれないんですよね。都会なら、別に意見の違う人と出会わないでも生きていけるんですけど、それは田舎はなかなか難しいので、そんなことより、一緒に楽しく過ごせたほうがいいよねっていうことが優先されるっていう意味で、さっきの渡辺あやさんと、このあいだ対談する機会があったんですけど、そこでも本当に同じような考え方をされてて。結構文化人類学って、フィールドワークとかってそうですよね。

小林　まあ、そうでしょうね。参与観察って、まずそこに参加するっていうことが前提なんでしょうから、参加できなかったら、いられないというね。そういうことだと思うんですけども。

平尾　現代の社会自体もそうですし、最近の若い人たちは、特にウェブ上の世界とかで、自分と似た仲間と集まったりとか、なかなかそこから外の世界に開かれないみたいなのもあるんですけど。ちょっと最後になってきたので、せっかく母校に帰ってきていただいたので、今、同級生とか先生との対話はありましたけど、若い学生たちもいます。後輩の学生たちに向けての、何かメッセージみたいなことをちょっと。卒後何年ですか、今。

山﨑　20年ぐらいですか。

平尾　20年ぐらい。20年の先輩から、一言。

山﨑　自由にしたらいいと思いますけど（笑）。

平尾　（笑）

山﨑　やりたいようにしたらいいと思いますね。そんな偉そうなこと、全く言えないです。でも、いや、しっかりしてますよ、本当に。若い人たちっていうか。

平尾　本当、優等生。

山﨑　信じたい。おっさんの言うことなんか聞かなくていい。

平尾　（笑）レジスタンスでね。

山﨑　本当にやりたいことがあれば。自分で考えてやればいいんじゃないですかね。

平尾　僕の映画も観たければ観ろと。

山﨑　いや、うちの映画は観てほしいですね。

平尾　これは観てほしい（笑）、これは。

山﨑　それはしっかり観ていただければうれしいです。

平尾　京都みなみ会館、大阪シネ・ヌーヴォ、神戸だったら元町映画館で。

山﨑　ええ。

平尾　この１カ月ぐらいはずっと上映されてると思いますし。もう本当に僕もウェブ上で評を見るのが楽しみなぐらい絶賛ですね。いろんな人がいろんな意見を言うことができる、不思議な映画です。ぜひ、皆さんもご自身の目で観て、ご自身で感じたことで、自分の物語に活かしていただけたらと思いますね。

山﨑　若い学生さんに、つけ足すと、何

か相談があれば、皆さん、小林先生のところに行けば、全部打ち返してくれると思いますんで。

平尾　そうですか、はい、わかりました（笑）。

小林　今、平尾先生が言ってたことは、祷キララさんのことですよね。キララさん、非常にやっぱり、舞台挨拶の中でも語ってましたし、パンフレットの中にも書いてありましたけども、非常にしっかりした人で。今、若い人がしっかりしてるっていうのは、ああいう人とつき合ってるからかなというふうに思いました。

山﨑　いやいや、本学学生を軽くディスらないでください。

平尾　（笑）そういう、今の言葉にイラッとした学生は、小林先生にぶつかってこいということでしょうね。

山﨑　それができる時期ですよ。本当になくなりますから、そんなのは。卒業しちゃうと。それは義務ですから、先生の。

平尾　（笑）。そうですね。

山﨑　だと思ってますので。

平尾　ありがとうございます。小林先生、最後に、ほかに言い足りないことがありましたら。

小林　こういうかたちで、私もここに舞台に上げていただいて、山﨑さんと話がこういうかたちでまたできたっていうのはうれしくて、もう一回話できればいいなと思ってます。本当に出藍の誉れだなと思ってます。

平尾　はい、ありがとうございます。監督、最後に、これからも含めて、どんなふうに歩んでいかれる予定でしょうかね。

山﨑　ちょっと、本当、かみさんに迷惑かけまくってるんで、子どもたちとの時間を増やしたいなと思ってますね。本心です、本心。本当に。

平尾　今日、この配信を見てはるんですか（笑）。

山﨑　いいや、わからないです、わからない（笑）。いや、本当に、女性の子育てをちゃんと考えたほうがいいと思いますね、この国は。

平尾　はい、わかりました。世界を平和にするためには、

山﨑　かみさんから、おまえが言うなって言われます（笑）。

平尾　そういうツッコミが、多分、遠く岡山のほうではささやかれると思いますけれども、世界を平和にするためには、家に帰って家族を大事にしてくださいと、某誰かも言ってますから、われわれも今日は帰って（笑）、ですね。

山﨑　はい。

平尾　はい。本当に、山﨑監督、小林先生、どうもありがとうございました。

山﨑　ちょっと、ひとこと、すいません、『やまぶき』は京都みなみ会館でひと月ぐらいやってますんで、ここには多分80人ぐらいいると思いますんで、ぜひ、半分以上は劇場に足を運んでいただければなと思います。

平尾　いえ、半分と言わず、誰か一人は誘って、行ってくださったらと思いますね。

山﨑　ありがとうございます。

平尾　はい。山﨑監督、小林先生、どうもありがとうございました。また今後とも監督の映画と、それから京都文教大学、そして京都文教大学の臨床物語学研究センターも、またよろしくお願いします。おつかれさまでした。

会場　（拍手）